

柔道衣

を掴んだ指先には力がこもり、まるで蝶番のように相手を繋ぎ止める。引き出し

挿さぶり、流れを自分に引き寄せながら、ある一瞬をじっと待つ。相手が踏み込んできたその刹那こそ、絶好の機会だ。己の右足を相手の両足の間に深く送り込み、電光石火で振り上げる。

井上康生が必殺技として磨きをかけてきた「内股」。一本が決まるまでの時間は、わずかに1秒ほどだ。釣り手と引き手の絶妙なバランス、腰からつま先への滑らかな重心移動、振り上げた足の迅速さと相手の体を宙に放り出す威力、相手と自分の体重を支える畳に残した軸足の安定感。すべてにおいて完璧な彼の内股は、「世界一美しい内股」として知られている。

世界がその華麗な技に遭遇したのは2000年9月のシドニー五輪だった。大会7日目に行われた男子柔道100キログ級、準決勝までの4試合すべて一本勝ち（総合勝ちを含む）で突き進んだ康生は、決勝で宿敵であるカナダのニコラス・ギルと対戦していた。常に前へ出て主導権を握る康生に対し、ギルは一本負けを警戒し腰を引いて時間を稼いだ。

しかし、一閃する内股がギルの体をふわりと浮かせ背中から畳に突き落とす。2分9秒、一本勝ちで金メダルの栄冠を掴んだ康生は、歓喜の雄叫びを上げながら跪き、やがて両手を高く突き上げた。

あの美しい内股はどのように誕生したのだろうか。私がそう聞くと、彼は正面を見据えこう言った。

「子供の頃、父に憧れて体の動きや足の振り上げ方を真似ていた。父のように内股で自分より大きな選手を投げ飛ばしたい。そう思いながらがむしゃらに稽古していたら、いつの間にかそっくりの内股になりました。この技は自分にとって原点であると思っています」

柔道は、武器を持たず相手の攻撃力に順応すること

An Interview with the Athlete by Narumi Komatsu / Kosei Inoue

身を鍛え、また精神を修養するすべとして戦国時代に生じたこの武術に魅せられ、過酷な稽古に励んでいる。「ただ、柔道が好きなんです。柔道に出会い、こうして毎日稽古ができることに感謝しています」

康生が柔道を始めたのは5歳の時である。父・井上明が勤務する宮崎県の延岡署の柔道教室でのことだ。3人兄弟の末っ子である彼は、警察官の父を慕い、警察署の2階にある柔道場で父が稽古する姿をいつも見学していた。

「長男の将明も、次男の智和も、当時は柔道に興味をもたなかった。僕だけが柔道を習いたと言いました」
幼稚園児の康生が「柔道をやりたい」と言い出した時、一番喜んだのは父だった。母のかず子もまた康生が柔道を習うことに賛成し、父が師範を務める静充館柔道場へ息子の送り迎えを買って出た。

「子供時代は体格も良くて、どんどん強くなりました。小学生になると父に褒められたり一心で稽古にのめり込んでいく。その頃になると、次兄の智和も柔道を始めていたので、ライバル心も芽生えていましたね」
年上の中学生を相手にしても、負け知らず。宮崎県下でも強豪として知られた道場、静充館に通っていた康生の強さは抜きん出ている。父もまたそんな康生に容赦はしなかった。稽古も、ランニングも、人を背負っての石段上りも、中学生以上の練習量を息子に課した。

「負けず嫌いでした。人が途中でやめれば、自分は1段でも2段でも前に進んでやると、思っていました」
父は康生を子供扱いしなかった。小学4年生になると稽古中の態度を一変させる。

「お父さん、と呼んでも突然ゲンコツを見舞われる。子供ながらに3カ月も悩んで、ある日、兄が父を「先生」と呼んでいるのを見てはと気がついたんです。それで僕も「井上先生」と呼ぶと、父は黙って稽古をつけてくれた。道場では師弟関係でなければならぬ。

父の

僕が自分でそのことに気づくまで父は待っていた」
内股を習得したいと稽古に没頭する康生は、5年生の時に全国少年柔道大会で優勝を飾る。「この先はもっと厳しい稽古が必要になるぞ」と言った父に、10歳の康生は突然、こんな言葉を返したのだった。

「お父さん、遠慮しないで僕を鍛えてください。僕はね、柔道をするために生まれてきた子供だと思っくんよ。不思議だけど、そう思っくんよ。来年もまた日本一になってみせる。だから僕を鍛えてください」
康生自身もこの時のことは鮮明に覚えている。

「あの時は、柔道が楽しくて、勝つことは素晴らしいと喜びだけに満ちていた。その気持ちを何とか親父に伝えなかったんだと思います。もちろん、泣いたり、苦しいと思ったりしたこともあった。日本一になっても「お前などまだまだだ」と、父は褒めてくれなかった。それでも、父についていけば必ず強くなれる、そう信じていたんです」

康生は、警察官として自分を律し情も深く熱い男である父を仰ぎ見ることで、稽古の尊さを知った。そして、勝負に情熱のすべてを注ぐ康生に安らぎを与えてくれたのは母だった。

「母は、僕の稽古を始めから終わりまで見ていて、道場の板間に正座して、たじろぐこともなく見つめてくれていました。明るく潑刺とした母の応援があったこそ、苦しい稽古を続けられたんです」

中学に入ると康生の世界は一気に広がった。3年生の時には全国中学校柔道大会やジュニア国際柔道大会で優勝し、日本ばかりか欧州でもその名が知られるようになった。将来のオリンピック候補と名指しされた康生はさらなる鍛錬を求め、稀代の柔道家・山下泰裕のもとへ旅立つことを決めるのだ。

「高校進学の時、真っ先に思い浮かんだのは山下先生のことでした。小・中学生の頃、九州で稽古をしても

宮崎

から上京し、東海大学付属相模高等学校に進学した康生は、山下の指導により柔道の奥義を学んでいた。

「中学生までは内股、大外刈、大内刈という技が主だったんですが、それだけでは足りない、背負投を指導してもらいました。また、得意な内股にしても、いろいろなかけ方があることを教わりました。自分より大きい身長2メートル、体重130、140キロある選手を投げるための動きや勝負のコツを、逐一教えてくださったんです」

時にはホームシックにかかり涙したこともあったが、道場に立てば一心不乱に技の習得に挑んだ。

倒れるまで稽古しながら、そのすべてが身につについていく実感を感じた康生は勝利という結果を次々に紡ぎ出していった。全国高等学校柔道選手権では個人戦・団体戦ともに優勝し、また全日本柔道選手権には高校生として山下以来21年ぶりの出場を果たしている。00年のシドニー五輪候補選手として注目を集める康生の進撃は、東海大学に進んだ後も止まらなかった。

「大学1年の時、講道館杯といって日本のトップを決める大会で優勝したんです。1997年ですが、その時に、いよいよオリンピックでメダルを狙える位置に来たんだな、という手応えを感じました」

翌年のアジア競技大会でも優勝した彼の強さは鉄壁かと思われた。が、この直後からスランプが彼を襲った。体調は万全で完璧な動きをしているはずなのに、歯車は噛み合わない。不調は深刻だった。

「毎日、一生懸命考えながら練習をする。これで修正できたかなと思っても、実は全然できていなかった。技も、今までどおりにかけているつもりなんです、



Kosei Inoue

井上康生
(いのうえ こうせい)
1978年宮崎県生まれ。出身道場は静光館。総合警備保障所属。5歳から柔道を始める。小学4年生の時に宮崎県大会に出場し優勝。以来、数々の大会で優勝を果たす。99年世界柔道選手権・初出場初優勝。2000年シドニー五輪金メダル獲得。01年には、全日本柔道選手権大会にて優勝を飾る。

まったく決まらな。ついにはあばら骨を痛め、3週間も練習を休むことになるんです」

勝つことに慣れていた康生は途方に暮れる。シドニー五輪前年の99年になると3大会連続で負け、その前途には暗雲が垂れこめた。自分の柔道を見失い苦しむ康生に悲報が届いたのは、99年6月21日のことだった。「朝、トレーニングを終えて携帯を見ると、上の兄から何度も着信が残っていたんです。すぐに智和に電話をしたら、もう泣き崩れている。「お母さんが」と叫んだ声でわかりました。宮崎の実家のほうに電話をしたらクモ膜下出血で午前3時頃亡くなったということでした。前日も電話で、いろいろな話をしていましたから、ただ信じられないという思いだけでした」

葬儀から1週間後、団体戦があった。家族や周囲は傷悼しきった康生に辞退を勧めたが、彼は出場した。「団体戦は責任があります。最後になる4年生のためにも、ポイントゲッターの僕は休めなかつた。これがまた不思議な話なんです、母親を亡くしてから稽古を再開すると、鈍っていた勘が元に戻ってきたんですよ。僕は、母が身を呈してこの感覚を取り戻させてくれたのか、と感していました。そんなことしなくてもすぐに復活してやったのに、そう考えながら、母に「ありがとう」と言っていました」

99年10月、バーミンガムでの世界柔道選手権100キロ級に優勝。そのままの勢いでシドニー五輪に臨み、ついに本懐を遂げた。金メダルを授与された表彰台で母の遺影を掲げたのは、康生の勝利を誰よりも望んでいた母への感謝の言葉の代わりだった。

2001年になると総合警備保障に入社。柔道部に所属しながら、同時に大学院へも進学する。

出場する国内外の大会では向かうところ敵なしとなり、康生は日本柔道の先頭に立ち疾走し続けていた。04年8月、アテネ五輪が開催されると誰もが康生の金メダル2連覇を信じて疑わなかった。しかし、予想

はいとも簡単に覆される。4回戦、オランダのファン・デル・ヒーストに背負投を合わされ一本負けを喫する。続いて行われた敗者復活戦でも一本を取られ、康生のオリンピックはあまりにも呆気なく終わったのだ。敗因は、自分の柔道の完成形をつくりきれなかったことにあると思います。たとえば内股。体を90度回転して足を跳ね上げるのが理想なんです。それが45度ぐらいしか回転できない。そうなると思えば、それが45度き目がなくなる。それでも強引に投げられるはずだと、過信した部分もありました」

3月に左膝内側の靭帯を傷めながらも休むことを恐れ、違和感を覚える膝を庇いながら稽古を続けたことが原因だった。

「膝の怪我によって自分の柔道が少しづつ壊れてしまった。膝の痛みを耐えながら、だましましたしやっていたら自分の柔道が失われていた。自分でもそれに気がついてたんですけど、オリンピックでなら絶対に不調を覆せると自分に言い聞かせていました。そんな強気すら、裏目に出てしまいましたね」

負けた責任はすべて自分にある。ただ、応援してくれた人たちへの期待に応えられなかったことが康生にはつらかった。

「柔道をやめてしまおうと思ったこともありましたが、自分のことより皆さんの期待を裏切ってしまったことに耐えられなかったからです」

父は落胆した息子に「ゼロからのスタートだ」と語りかけ、息子も父に「これからも見守ってほしい」と再起を誓った。しかし、過酷な運命が再び康生を翻弄する。

05年1月

という重症を負ったのである。右肩が使えなければ柔道は戦えない。「手術しなければ60〜70パーセントの力

の嘉納杯で優勝し

ながらも、決勝戦で右大胸筋腱断裂



Kosei Inoue

しか戻らない」と医師から告げられ、康生はリスクのある手術を受けることにした。

「胸と肩を繋げる腱があり、その上に大胸筋が膨らんで張っているんですけど、その大胸筋が腱ごと剥ぎ取られてしまい、胸の筋肉が垂れ下がっているような状態でした。手術を受けたあと「1年ぐらいのブランクは覚悟しろ」と医師に言われましたが、北京を目指すためには迷っている時間はなかったんです」

術後は順調だったが、当初右腕は動かなかった。「これまでどんな相手でも投げ飛ばしていた自分の右腕がまったく動かない。できることといたらひたすら散歩をするだけです。散歩や就寝中も、腕を縛って動かさないようにしてなければなりませんでした」

ようやくリハビリが始められたのは手術から1カ月が経過した頃だった。

「毎日少しずつですけど、できなかったことができるようになっていく。10センチ動かさせた、100グラムが持ち上げられたと、喜びました。これは、それまでには知らない感動だった」

康生は長いトンネルを抜け出し、北京へ向けて走り出す自分の姿を俯瞰することができるようになっていった。だが、またも康生は奈落に突き落とされる。長年康生を支え続けていた長兄・将明が突然死で亡くなったのだ。32歳の若さだった。

「宮崎から大阪に出張し、宿泊しているホテルでのこ

とでした。一番上の兄は本当に優しい男で、母が亡くなったあと、病気をした父や、柔道に打ち込む僕や智和を支えることに力を尽くしてくれました。そんな兄の命がまたしても母と同じように突然、奪われた。僕は、試合に臨む前、勝たせてくださいと天に祈っていました。しかし、兄の葬儀の時には、この世界には神様などいないのだ、と考えました」

絶望の淵に立った康生が感じたものは、人生の儚さとその対極にある人間の力強さだった。

「失意の底にあっても、人は生きていかなければならないんですね。簡単に死ぬことなどできないんです。山下先生がおっしゃる『人はいかに生きていくかが大切なのだ』という言葉が、僕の胸に響いていました」

不屈の闘志を滾らせ立ち上がった康生は、06年5月に行われた全日本実業柔道団体対抗大会で3度の一本勝ちを奪い、総合警備保障優勝の立役者となった。

現在、父は宮崎より単身上京し、康生の特別コーチとなった。父子で日々の稽古に勤しんでいる。

「シドニーオリンピックを目指した頃のように、もう一度初心に帰りたいんです。そのためには父に一人から稽古をつけてもらいたかった」

苦難を乗り越えた康生の胸に込み上げる思いとは、いったい何か。私の問いかけにその顔が微笑んだ。

「今は、北京の舞台に立ちたい、もう一度、金メダルを取りたいという思いが抑えられないほどです。僕自身を熱くする思いを糧に、一歩一歩進んでいきます」

北京五輪の先にある人生のために、彼は今日も道場に立っている。

小松成美 (こまつ なるみ)

ノンフィクション作家。人物ルポルタージュ、スポーツノンフィクションなどを各誌に発表。著書に、「中田語録」(文春文庫)、「中田英寿 鼓動」(幻冬舎文庫)、「イチロー・オン・イチロー」(新潮社)ほか、多数。最新刊は「さらば勲九郎 十八代目村松三郎 襲名」(幻冬舎)。

アスリート
インタビュー 第20回
文・小松成美

An Interview with the Athlete
by Narumi Komatsu
Text by Narumi Komatsu
Photographs by Kozo Fukunoka



柔道

井上 康生

Kosei Inoue

2006年アジア五輪男子柔道
100キロ級で金メダルを獲得した井
上選手。その後、激しい大会で優
勝しながらも、怪我、右足腓骨断裂
という重症を負い、およそ1年間のリ
ハビリ生活を送ることとなった。さ
まざまな苦難に遭遇しながらも、復帰を
遂げた井上選手の柔道にかける思いを
聞いた。

撮影・福岡耕造

鍛錬